

娘のくりひろい (新潟県)

昔がひとつあったと

むかし、あるところに、ふたりの姉妹がありました。姉娘は前の母親の子で、妹娘は今の母親の子でした。

ある秋の日のことです。母親が娘たちに、山へ栗拾いに行かせました。

「ふくろがいっぱいになるまで帰ってくるな」といって、姉娘には、穴の開いたふくろを持たせ、妹娘には、いいふくろをわたしました。

ふたりは山へ入って行きました。

栗が落ちているところまで来ると、姉娘は、

「栗があった」といって、つぎつぎにふくろに入れていきました。ところが、ふくろに穴が開いていたので、栗はみな、知らないうちに地面に落ちてしまいました。後から歩いてきた妹は、その落ちた栗を拾っては自分のふくろに入れました。

やがて、妹のふくろは栗でいっぱいになりました。

「ふくろがいっぱいになったから、帰ろう」

妹がいうと、姉は、

「おまえ、もういっぱいになったのか。わたしはまだだから、帰れないよ。おまえ、先にお帰り」といいました。妹は帰って行きましたが、姉は栗をひろい続けました。

そのうち、日が暮れかかると、姉は、木の根っこを枕にして、うつらうつら眠りこんでしまいました。

しばらくすると、旅のお坊さんが通りかかって、

「こんなところで寝てはいけない」といって、娘を起こしてくれました。そして、娘のふくろを見て、

「穴の開いたふくろはいっぱいにはならん。わしがなんとかしてやろう。それから、おまえにこの箱をやるう。これは、どんな願いでもかなう箱だ」といいました。そして、小さな箱をひとつつけて、どこかへ行ってしまいました。

娘がはっと目を覚ますと、もう夜が明けていました。見ると、そばには、栗のいっぱい入ったふくろと、小さな箱が置いてありました。娘は急いで、ふくろと箱を持って家に帰りました。

家に着くと、母親が、

「おまえ、今頃までなにをしていたんだ」といって、娘をひどくしかりました。

あくる日は、村のお祭りでした。

母親は、姉娘に、

「わしらは祭りに行くから、おまえはうちにいて、石うすでそば粉をひいて留守番しておれ」といって、妹娘を連れて行ってしまいました。

娘は、あちこちから、チンチンドンと、かねや太鼓の音が聞こえて来るので、祭り

に行きたくてたまりません。けれども、着ているものはぼろぼろで、晴れ着もありませんでした。娘は、昨夜のことを思い出して、お坊さんからもらった箱を取りだしました。

「晴れ着がほしい」というと、箱は、美しい着物を出してくれました。娘はよろこんで、

「帯がほしい」

「足袋がほしい」

「下駄がほしい」と、つぎつぎに出してもらって身に着け、祭りに出かけて行きました。

「祭りが終わるまでに帰ったらいい」と思って、歩いて行きました。

町の人たちは娘を見て、あまりの美しさに、大さわぎしました。そのうわさを聞いて、やがて、お殿さまがやって来ました。けれども、娘は、

「もう日が暮れる。お母さんが帰って来たらたいへんだ」と思って、急いで家に帰って行きました。あわてていたので、下駄がかたほう脱げましたが、拾うまありませんでした。家に帰ると、娘は、何事もなかったように、ぼろを着て、石うすでそば粉をひいていました。

やがて、母親と妹が帰って来ました。妹は、

「姉さんは、やっぱりそば粉をひいている。さっきの美しい人は、とてもにっていたけれど、姉さんじゃなかった」といいました。

二、三日して、お殿さまの家来がやって来て、いいました。

「お殿さまが、祭りで見かけた美しい娘をさがしておられる。このうちに娘がいるそうだが、会わせてくれ」

母親は、よろこんで、

「はいはい。うちにはこの子しかいません」といって、妹娘を出しました。家来は、

「では、この下駄をはいてもらおう。この下駄は、娘が落していったものだ。下駄が足にぴったり合う人がその娘だ」といいました。

妹は下駄をはいてみましたが、足に合いませんでした。家来は、庭のすみで石うすを回している娘を見て、

「あそこでそば粉をひいている娘にも、はかせてみる」といいました。娘が下駄を書くと、げたは、足にぴったり合いました。

娘は、お殿さまの嫁になって、いつまでも幸せに過ごしました。

それでおわりなんだとさ